

ユズの生産安定に関する研究

町田啓二・北岡 淳・庭瀬守昭・真鍋 札

Studies on the stabilizing production of Yuzu (*Citrus Junos* Sieb.ex Tanaka)

Keiji MACHIDA, Jun KITAOKA, Moriaki NIWASE and Tadashi MANABE

要 約

ユズの安定生産技術を確立するため、隔年結果防止技術とこ斑様症状軽減対策について検討を行った。

1. ユズの生産性は、ステムピッチング（S P）発生度0～49では葉果比を100：1に摘果することにより、果実も大きく、安定した収量が得られるが、S P発生度50以上では、100：1以上に摘果しても果実の肥大が悪く生産性の向上は望めなかった。
2. 摘果の時期は、生理落果が終る7月下旬が適当であり、青玉を利用する場合は7月下旬から順次摘果し、9中旬までに葉果比100:1にすると良い。
3. 収穫時期は早い方が良く、遅くなるほど翌年の隔年結果性が強く現れる。したがって、完全着色してから収穫するのではなく、7～8分着色した果実から収穫するのが望ましい。
4. S P発生度と収量・品質の関係では、S P発生度29以下では収量が安定し、果実のこ斑様症状の発生度も低く、大果の割合が高くなった。しかし、S P発生度50以上では、こ斑様症状の発生度も高く、果実が小玉となり、収量・品質とも低下した。
5. 優良系統の選抜の結果、“永野系”を優良と認めた。“永野系”は早期結実性、連年結果性、収量および果実の肥大に優れ、さらにC T V羅病程度も極めて軽く、凸型こ斑様症状が少ないことがあげられた。
6. 簡易雨よけ被覆は、凸・凹型こ斑様症状の発生を軽減させた。特に凹型こ斑様症状でその効果が顕著であった。

キーワード：ユズ，栽培，常緑果樹，摘果，隔年結果，病害